

『とよかげ』における歌の機能の一考察

——童のべに関する歌の再考——

* 高橋 秀子

一、はじめに

現存する益田家旧蔵本の『一条摂政御集』の内、冒頭から四一番歌までは、一条摂政すなわち藤原伊尹の自撰による物語的な部分で、『とよかげ』と呼ばれる。このことは、『大鏡』の記述や鈴木棠三氏の論考などによって定説となっており、認めるべきものである。つまり、『とよかげ』は、伊尹がある意図に沿うように歌を配列したものである。ここに収められる四一首は、伊尹の意図を体現する要素を持つものとしてあると言える。また、伊尹は、自分を「おほくらのしじやうくらはしのとよかげ」という「くちをしきげす」に仮託し、彼を主人公にしてこの作品を書いている。このように、自分のやりとりした歌を用いて虚構の人物の物語を作っていることから、詠まれた歌がさらに役割を担って活用されるという動きが見える。『とよかげ』は、一〇世紀の和歌史を捉える上で重要な作品であると言える。筆者は、当時の歌の用いられ方と機能を捉えるという観点から、『とよかげ』における歌に着目する。

『とよかげ』の四一首は、とよかげと八人の女性との贈答歌であり、そのやりとりが女性毎にまとめられている。その各まとまりは、段と称されることが多い。段という呼称については、『伊勢物語』などとの相違を考えると、検討するべきものだと思われるが、今のところ筆者もこれにならっておく。本稿では、「うちわたりなりける人」との話である五段を取り上げ、当該段に見える伊尹の意図と、ここに配される二一番歌から二三番歌の機能を考察したい。当該段は、伊尹の意図や歌の機能を考える上で、示唆に富んでいる箇所と考えられるのである。当該段を次に示す。

もののおんありて、このおきな、うちわたりなりける人に、ものいひけり、のべといひけるわらはつかひけるひとのもとに、ひるよりちぎりけれど、女はえしらで、ただのべにのみあひてあるに

しる人もあらじにかへるくずのはあきはてがたのべやしるらん (二二)
まつむしのごもきこえぬのべにくる人もあらじによさへふけにき (二二)

またのとし、こののべがしにければ

白露はむすびやすするとはなすすぎとふべきのべも見えぬあきかな (二三)

これにてぞなくりにけりとはしりける、

当該段は、女性ととよかげの仲介役である童のべが登場しているという点、のべに関連する歌のみで構成されているという点、初めの二首と最後の一首の間に一年が経っているという点で、他の段にはない特徴を持つ。これらの特徴に、伊尹の意図を窺えるだろう。二一番歌と二三番歌の内容については、従来の解釈に揺れがあるが、場面に即した内容としてより適切な解釈が可能であると考えられる。また、二三番歌や当該場面の意図に関する先行研究にも、再考するべきところがある。

筆者は、当該段では、童のべが、とよかげと女性の仲介役として現実では十分に働いていない一方で、歌の中ではとよかげの思いを伝える表現を作り出して仲介役を果たしているという違いが示されていると考える。以下、各歌について、従来の解釈を検討しながら内容を考察し、伊尹の意図と歌の機能に迫ってみたい。

なお、右の引用部に続いて、次のような記述がある。

そのをりはいとをかしとおもひけることどもありけれど、ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり

この記述を五段の後書きとする見方が多い。一方で、五段にのみこのような後書きがあることを不審とし、これを冒頭^④に対応する跋文と見て、伊尹が一端ここで作品を終えようとした痕跡と捉える見方もある^⑤。筆者も後者の見方に従う。

二、二一番歌の解釈

詞書より、とよかげが「うちわたりなりける人」である女性に会う約束をしていた

〔キーワード〕『一条摂政御集』／『とよかげ』／藤原伊尹／歌の機能／掛詞

*平成二二年度生 比較社会文化学専攻

ものの当の女性がそれを知らなかったこと、とよかげは彼女の使う童のべにだけ会ったことが分かる。女性がとよかげの約束を知らなかったのは、約束の取り次ぎが上手くできなかったからである。そして、女性の使う童のべの存在が示されていることから、のべの取り次ぎが不十分であったのだと解してよいだろう。

二一番歌は、従来の解釈と同様に、とよかげが会えなかった女性に贈ったものと考えられるが、従来その根拠は示されていない。当該歌は、とよかげ、女性、のべの三人の関わりが語られた上で配されている歌なので、本稿では、とよかげが女性に贈ったものと考え筆者の根拠を示しておこう。

歌に「しる人もあらじにかへるくずのは」とあり、これが、とよかげが当の女性に來訪を知られずに帰っていくことを表していることは、明瞭である。「あらじ」には「嵐」が掛けられ、「嵐にかへる」という文脈によって、とよかげが相手に知られないというつらい目に遭って帰る様子が表される。つまり、「しる人もあらじにかへるくずのは」は、とよかげが來訪した事実を伝える表現でもある。また、知られずに帰るということ、つらさを訴えるように「嵐にかへる」と表す主体は、とよかげ本人と考えるのが自然である。そして、とよかげが來訪の事実を伝えるべき相手であり、今回の件を「嵐にかへる」と表して伝えるのに適切な相手は、会うはずだった女性であろう。よって、当該歌を、とよかげが女性に贈った歌と解する。

さて、当該歌において再考するべきと思われるものは、「くずのはあきはてがた」という表現である。従来の解釈を踏まえると、ここに二つの問題点を見出せる。問題点の一つ目は、「くずのは」の最後の「の」、すなわち「くずのは」から「あきはてがた」へ続く「の」の用法及び訳し方である。二つ目は、「あきはてがた」の意味である。従来の解釈を挙げてみよう。『一条撰政御集注釈』(以下『注釈』と称す)は、当該歌を次のように訳している。

来たことを知ってくれる人もないひどい仕打ちに帰る私の怨みを、私にあきてしまつたあなたの使っている野辺は判っているだろう。

木船重昭氏は、『注釈』を踏まえて再考を示した(木船氏によるこの注釈を、「木船注釈」と称す)。当該歌については次のように述べている。

一首の意は、わたしに約束どおり訪れて来たことを知ってくれるあなたもいらないので、嵐に葛の葉の裏返る野辺を帰るわたしの恨みを、秋も果てようとするこの頃の野辺は知っていますよ。——その裏に、あなたはわたしにもう厭き果ててわたしを袖になさつたが、童女野辺は飽き果て難く、名残り惜しく

わたしのことを思ってくれたよ」という皮肉を込めているのであろう。

『新日本古典文学大系』(以下『新大系』と称す)は次のように訳している。

約束をした人も不在で、つれない嵐に翻弄される葛の葉のように、すこすこと帰る愛想づかしをされた私のことをさぞかし野辺はわかつてくれるだろうよ。

まず、「の」の問題から考えていきたい。従来、ここでの「の」は、対象を表すものとして解釈され、右に挙げた諸注釈において「を」と訳されている。このように、「あきはてがた」へ続く「の」を、対象を表す用法として解することに疑問を覚える。ここでの「の」は、「あきはてがた」という名詞に掛かってくることに注意しなければならぬのではないか。もつとも、「の」にも対象を表す用法があるが、それは、『角川古語大辞典』が示す例で知られるように、「の」が用言にかかる場合に見られる。続く「あきはてがた」の「あき」には「飽き」が掛けられていると考えるのが適切であり、仮に、「の」が動詞「飽き」に掛かってくるのだとしても、景物の文脈としては、嵐に吹き返る葛の葉の秋の終わり頃の野辺が表される。その文脈において、葛の葉を対象として解すると意味が通らない。やはり、「の」を「を」と同義で解することには首肯し難い。また、当該例のように名詞へ掛かる「の」を、対象を表す用法として解する例は、他に見られない。この「の」は、主格或いは連体修飾格の用法として解するのが適切であると考えられる。よって、景物の文脈は、「の」を主格として解すると、葛の葉が秋の終わり頃になった野辺という意、連体修飾格として解すると、葛の葉の秋の終わり頃の野辺という意と言えよう。どちらも内容上大差はない。重要なことは、「くずのは」が「あきはてがた」に掛かるということである。

では、「くずのはあきはてがた」を人事の文脈としてどのように考えたらよいのだろうか。そこで、二つ目の問題である「あきはてがた」の意について考えたい。「くずのは」は詠み手であるとよかげを表すので、これが「あきはてがた」に掛かっているという表現を、どのような内容として考えられるか、ということが重要である。

「あきはてがた」は、従来の解釈に揺れがある。一つは、相手の女性かとよかげを嫌になつてしまつたという意を読み取るものであり、『注釈』と『新大系』がこの解釈を示している。一方、木船注釈は、「がた」に「難」が掛けられていると解し、自分のことを「飽き果て難く」思うのべという意を読み取っている。他の注釈と異なり、「飽き」の主語を童のべとしているのである。ただし、歌意の説明の中に、「あなたはわたしにもう厭き果ててわたしを袖になさつたが」とあるため、女性かとよかげを嫌になつたということ的前提にした表現として捉えているようである。

いずれの解釈も適切とは言えない。まず、「飽き」の主語を女性とするのは、詞書に合わない。詞書にある「女はえしらで」とは、女は知ることができないでという意であり、不可能を表す表現である。女性がとよかげの来訪を知らなかったことについて、女性の落ち度ではないように表されていると言える。そして、童のべの取り次ぎの不備が原因で女性が来訪を知り得なかったということを、とよかげも承知していると読める。来訪を知らなかったのは女性の故意ではないことを表す詞書がありながら、歌の中で、女性がとよかげを嫌になつてしまったのだと表すのは、不自然である。また、「飽き」の主語をのべと解することにも首肯できない。とよかげが女性に、のべがとよかげをどう思っているか伝えることには、女性に贈る歌としての意味を見出せない。このように「飽き」の主語の解釈が揺れているのは、前に示したように、「くずのは」から続く「の」の用法が正しく理解されていないからだと言える。ここで再び、「の」の用法を踏まえて考えたい。「くずのは」は「あきはてがた」に掛かっているため、人事の文脈では、「くずのは」に表されるとよかげ自身が「あきはてがた」に掛かると考えるべきであり、「飽き」の主語はとよかげであると解することができる。

「飽き」の主語はとよかげであり、その対象は「のべ」である。この「のべ」は、景物の野辺の他に、詞書に示された童の名を表すはずだが、ここでとよかげが、自分が童のべをどう思っているかということを表しているとは考えにくい。なぜならば、当該歌は会えなかった女性に贈る歌であるからだ。「飽き」の対象である「のべ」は、とよかげと女性の二人の仲を表すと考えられる。景物の文脈である「あらじにかへるあきはてがたののべ」は、「あらじ」と「嵐」の重なりが表すように、女性がとよかげの来訪を知らなかったというできごとによって生じた表現である。つまり、「のべ」の景色は、とよかげと女性の間のできごとによって生じた表現である。よつて、「のべ」は二人の仲を表すと考えられる。童を表す「のべ」は、続く「のべやしるらん」という表現において意味を持つと考えられる。

しかし、「あきはてがたののべ」とは、とよかげが二人の仲を嫌になつてきたといふことではないはずだ。自分から相手に対して嫌になつたと伝えることは一般的ではない。ここでは、「あきはてがた」の「がた」に、「方」と「難」が掛けられていると考えるのが妥当であるように思う。木船注釈もそのように解しているが、「飽き」の主語をのべと解している点は筆者と異なる。

歌において、「方」と「難」を掛ける例は、同時代までにも見られる。例を挙げよう。

・ 旅雁秋深独別群

行くかりも秋すぎがたに独しも友におくれてなきわたるらむ

（『千里集』（書陵部蔵本）四九）

右には「秋すぎがた」とある。これについて『千里集全釈』は、「すぎがた」に「過ぎ難（し）」をかけるか」と注し、一首を「飛び去っていく雁の過ぎがたく（秋のゆくのを惜しむように）ひとり仲間遅れて空を鳴き渡っているらしい」と訳している。続いて、「あきはてがた」を詠み込んだ歌の例を挙げる。

・ しらつゆのおくてのいねもかりてけりあきはてがたになりやしぬらん

（『頼基集』「寛平の御ときの屏風の歌」四）

・ きりぎりす

つゆむすぶあきはて方のきりぎりすくさのねごとさむくこそなけ

（『元真集』「天徳三年九月十八日にかうしに、中宮の女房歌合せむといふによめる」六四）

・ ものいふ人に、ことひとかよふとききていきたるに、をみなへし折りていだしたるに

をみなへしなべてくさ葉におくつゆのあきはてがたに見ゆるころるか

（『元真集』一三三）

これらにおける「あきはてがた」の「がた」に、「難」は読み取れない。しかし、当該歌を、「難」を読み取らずに解釈すると、とよかげが嫌になつてきたものは女性との仲ということになつてしまう。やはり、当該歌の「がた」には「難」を読み取るべきと考えられる。そして、「あきはてがたののべ」とは、とよかげが嫌になつてしまひ難い二人の仲という意であると考えられる。

最後に、「のべやしるらん」について考えたい。のべが知るはずのこと、すなわち「しる」の目的語に当たるものは、「しる人もあらじにかへるくずのはあきはてがたののべ」に表されるように、とよかげが相手の女性につらい思いをさせられても相手を嫌に思わずに慕い続けているということであろう。

筆者は、この部分が、疑問の意の係助詞「や」を用いた表現になつていないことに注意したい。従来の解釈では、疑問を表す形であることにあまり目を向けられていないようである。前に示した諸注釈は、この部分を推量の形で訳している。確かに、歌における「Aやしるらむ」の用例を見ると、この表現は、Aは知っているだろうという程度の確信を伴っている場合もある。例として次の二首を挙げられる。

・ 題しらず
よみ人も

きくの花長月ごとにさきくればひさしき心秋やしるらむ

〔後撰和歌集〕秋下・三九七

また、ひと

きみこふるなみだもそでにもりぬればわれよりほかに人やしるらむ

〔中務集〕(西本願寺蔵本) 一六二

これらは、歌の中に、Aがそれを知っていると思う根拠が示されているので、知っているだろうという確信が滲む。二一番歌では、のべが知っていると思う根拠を読み取れないので、疑問の意を読み取ってよいだろう。

以上より、当該歌について、〈私が来たことを知る人もいないだろうから帰る私が、嫌になつてしまい難く思っているあなたとの仲——嵐に吹き返る葛の葉が秋の終わりに頃になつている野辺——を、のべは分かっているだろうか〉という内容と解釈する。

『注釈』や木船注釈は、「嵐にかへるくずのは」に相当する訳に「怨み」「恨み」を含めている。しかし、当該歌では、既に述べた「の」の用法や「あきはてがたのべ」の意味の考察から、とよかげに「うらみ」があつたと読み取る必要はないと考える。

さて、ここで、女性に贈る当該歌に、「のべやしるらん」というのべに関する疑問を詠み込んで理由を考えてみたい。詞書でのべについて語られた上で、そののべが詠み込まれているということ踏まえると、歌の中ののべには、詞書にある彼女の情報を関与させていると考えるべきであろう。つまり、のべが女性とよかげの取り次ぎに失敗したこと、とよかげが女性ではなくのべに会ったことが関わっていると考えられる。とよかげは、女性に会えずにのべに会ったが、当の女性への思いを持ち続けている。歌を贈っているのはその証である。のべは、役割上、とよかげが女性に会いに来たことや自分がとよかげと会ったことを、女性に伝えるはずである。それを想定したとよかげは、のべが女性に伝える時に、自分が女性を嫌に思い難いこと、つらい思いをさせられても慕っているということをも、伝えてもらわなければならないと思つたのだと考えられる。ただし、のべは、今回のように取り次ぎに不備がある可能性があるため、とよかげは、自分の思いが上手く伝わらないかもしれないと思つたということなのではないだろうか。そこで、自分の気持ちをのべが分かっているだろうかと詠むことによつて、自分の気持ちが確実に伝わるようにしているという仕組みなのだと考えられる。また、童のべに関するできごとを利用して詠むことは、女性への誠意を伝える上で効果的に働いていると言える。「のべやしるらん」という表現には、のべを仲介役として位置づける意識が表れている。これにより、女性への思いがのべへの思いを上回る絶対的なものであるということを表し得ている。

このように考えると、当該歌は、とよかげが、つらい思いをさせられても女性を慕い続けるという強い思慕を率直に伝える歌であり、童のべに関わるできごとを踏まえることは、女性への誠意を明確に表し得る表現となり得ていると解することができる。従来の解釈では、とよかげがのべと会ったことをほのめかしながら、会つてくれなかつた女性に皮肉を述べたものと捉えられている。しかし、「くずのはあきはてがた」という表現に着目し、詞書の表現に即しながら解釈することによつて、とよかげが女性に率直に思慕を伝える歌と捉えることができる。

三、二一番歌の解釈

二一番歌は、現存本では二一番歌から連続しており、間に詞書などがない。従来の解釈の殆どは、当該歌も二一番歌と共に、とよかげが会えなかつた女性に贈つたものと解している。『とよかげ』の他の段には、このように複数の歌が連続しているところや、同時に複数の歌を贈っているというところはないため、現存本の上では当該歌は異質である。木船注釈は、当該歌について、「のべ」「人もあらじ」が「二一番歌に対応している」ことから、「二一番の贈歌に対する女の返歌」と解しており、「かへし」が脱落したのである」と述べている。筆者は、当該歌について、その表現から、とよかげが女性に誠意を伝えるべく贈つたものと考えている。いずれにしても十分に解せないところがあるが、従来の解釈を検討しながら、私見を述べたい。

『注釈』は当該歌を次のように訳している。

待つ人もいない所にやつてくる人もあるまいに、私はやつてきたのだが、嵐が吹いて、相手はつれなく、その上、夜もふけてきた。

右では「のべ」に童が読み取られていない。とよかげ詠であるなら、詞書に示されている童の名「のべ」を適応させるべきだろう。そうすると、「まつむしのこゑもきこえぬのべ」は、童のべについて表すものと言えよう。この表現は、松虫の声が聞こえてこない野辺の景を表すと同時に、童のべがとよかげと会うことを待つていたわけではないことを表すと考えられる。「まつむしのこゑもきこえぬのべ」に「くずのはあきはてがた」を待つていないわけはないのべに会いに来るはずもなかつたという意を表すと考えられる。『新大系』は当該歌を次のように訳している。

(松虫の声でも聞える野辺ならともかく) 松虫の聞えぬ、秋はてがたの野辺に、

今さらあの人がやって来ることもあるまい。その上、夜もふけてしまったことだ。

「のべにくる人」を女性と解しているが、女性が会いに来るといことは当時において考えにくい。「のべにくる人」は男性であり、当該歌ではとよかげのことであろう。

「くる」という表現は、訪ねるとよかげよりも、童のべ本人或いは女性の表現と考えるほうが自然であり、一見、当該歌はのべ或いは女性の歌であるように見える。しかし、「人もあらじによさへふけにき」という表現について考えると、とよかげ詠と解するのが妥当であると思われるのである。注意しなければならぬのは、「あらじ」に掛けられた「嵐」、「さへ」、「き」であろう。二一番歌でも考えられたように、とよかげは、来訪を相手に知られずに帰るといつらい思いをしており、この経験を「嵐」と表し得る。「さへ」は、「までも」という添加の意を表す語である。当該歌では、夜まで更けてしまったと詠まれていたが、ここでの「さへ」は、「嵐」に表される経験に対する添加を意味するのであろう。女性に会えない上にそのまま夜まで更けて会えないままになってしまった、ということを表していると考えられる。また、歌の最後の「き」は、自分が直接的に経験した過去を述べる時に用いる語である。「あらじによさへふけ」の部分を見ても、これを自分の経験として語れるのはとよかげであると見える。当該歌を女性の返歌と解する木船注釈は、一首を次のように訳している。

松虫の声も聞こえぬ野辺に来る人もありますまいに。あなたがおいでになったのは待つ童女の野辺に逢うため、嵐が吹いた上に夜まで更けたように、あなたは童女野辺に逢った上に、しつぽり夜更かしまでなされたとおっしゃるわけですねこの訳では、「よさへふけにき」というとよかげの経験を女性が詠んでいるということになるが、女性がとよかげの立場になって「き」を用いて詠むと考えることには無理があるように思う。また、右の訳では、「嵐」が用いられる必然性が見えない。

以上より、当該歌はとよかげが女性に詠んだものと考えておくのが妥当であるように思う。内容は、松虫の声が聞こえてこない野辺に来る人もあるまい——自分を守っているわけではないのべに会いに来るつもりはなかったのだが、あなたが私の来訪を知ってくれないというつらい思いをした上にそのまま夜まで更けてしまった」というものと考える。とよかげはのべとだけ会ったが、それが予定外であったことを女性に伝え、「あらじによさへふけにき」に女性への恨み言を表して、あくまでも女性を思っていることを伝えようとしていると考えられる。当該歌も、のべに会ったことを詠み込み、それを予定外のこととして表すことで、二一番歌と同様に、女性への誠意を訴えるものになっていると言える。

一方で、とよかげが二首にわたって「人もあらじに」「のべ」という表現を用いている理由が掴めない。仮に当該歌のほうはのべに贈った歌だとしても、意味が通らぬ。その点では、女性の返歌である可能性も考えられる。しかし、女性の歌だとすると、右に述べたように、「あらじによさへふけにき」の意が通らない。さらに、「のべ」に童の名が掛けられているとすると、女性が「まつむしのごゑもきこえぬのべ」と詠む意味も不明である。やはり、女性の返歌である可能性は低いように思う。

四、二三番歌の解釈と当該段の三首の意図

二三番歌は、『新勅撰和歌集』に次のように収められている。

内わたりのさうしに、のべといふわらはにつたへて、ふみなどつかはしけるに、のべ身まかりにける秋よみ侍りける 謙徳公

しらつゆはむすびやすとはなすすぎとふべきのべも見えぬ秋かな

（『新勅撰和歌集』雑歌三・一二二九）
右は伊尹詠として収められている。現存本の『とよかげ』では、二三番歌の後に「これにてぞなくなりにけりとはしりける」と続いていることから、従来、二三番歌は女性からとよかげに贈られた歌として考えられている。そして、本来は伊尹詠で、『とよかげ』で女性詠となっているのは虚構であると考えられている¹¹⁾。

当該歌においても、「のべ」には童の名が掛けられているように、「白露はむすびやす」は、従来、のべが共寝をしてくれるだろうかという意と解され、「白露はむすびやす」とはなすすぎとふべきのべ」は、共寝をしてくれるだろうかととよかげがのべを訪ねることを表すと解されている。しかし、「白露はむすびやす」と言われているのは「はなすすぎ」であつて「のべ」ではないこと、そして、「はなすすぎ」と「のべ」は別物であることに注意しなければならないだろう。「白露はむすびやす」とはなすすぎとふべきのべ」における景物の文脈は、白露が置いているだろうかと花薄を見るために訪ねる野辺という意である。つまり、野辺を訪ねる本来の目的は花薄を見ることであり、野辺を訪ねること自体が本来の目的ではないのである。言い換えれば、本来の目的を達成する手段として、野辺を訪ねるといふことなのである。

これを人事の文脈に置き換えてみよう。「とふ」の主語、すなわち、のべを訪ねるのは、やはりとよかげと考えるのが自然である。すると、とよかげが本来の目的を達成する手段として、童のべを訪ねるといふことになる。とよかげがのべを訪ねること

によつて達成される目的とは、女性に会うことであると言えよう。よつて、当該歌の「はなすすき」には女性が重ねられており、「白露はむすびやする」とは、のべに關することではなく、女性がとよかげに会つてくれるだろうかという意と考えられる。

ところで、前に述べたように、『とよかげ』における当該歌は女性詠と解されている。しかし、「白露はむすびやする」が、女性が会つてくれるだろうかという意だとすると、女性がとよかげの立場になつて、女性が会うだろうかと言っていることになる。このような歌を女性が贈るのは、不自然であろう。当該歌の表現は、女性詠とは考えにくいものと言える。

『とよかげ』における当該歌も、やはり、とよかげ詠なのではないだろうか。そうであるならば、『とよかげ』における当該歌の内容は、「白露が置いただろうか」と花薄を見に訪ねる野辺——あなたが会つてくれるだろうかと私が訪ねるはずののべの姿が見えない秋であることだ」というものと考えられる。とよかげはのべの死を知らずにおり、仲介役ののべの姿が見えないことから、女性とのやりとりが円滑に進まなくなる不安を、当該歌によつて女性に伝えたということなのではないだろうか。また、当該歌に続いて「これにてぞなくなりけりとはしりける」とあるが、当該歌がとよかげ詠であるのなら、これは左注として意味が通らない。当該歌の後には、のべの死を伝える女性の返歌が脱落している可能性も考えられる。

では、『新勅撰和歌集』における当該歌すなわち一二二九番歌は、どのように解されているのか。『和歌文学大系』^②は、歌の訳や内容は示していないが、「花薄」について「相手の女性を寓意」と注しており、この解釈は筆者と同じである。『とよかげ』との関わりについては、「家集」で「相手の女の歌」とされていると指摘するに留まつている。『新勅撰和歌集全釈』^③は、「白露は結んだかと、花薄よ、(それを)訪うはずの野辺も——問うはずののべも見えない秋であることよ」と訳し、「秋の野の景に寄せての措辞と見て、少なくとも『新勅撰集』中の歌としては、特定の含意を読み取る必要はないかと思われる」と述べている。そして、『とよかげ』で「相手の女の詠んだ歌と解される」ということを指摘した上で、次のように述べている。

『新勅撰集』において伊尹の歌としたことは、定家の意図的な改変によるものなのか、あるいは定家の依拠した本にそのようにあつたものなのか、俄には断じがたい。

一二二九番歌の内容は、『とよかげ』における筆者の解釈とほぼ同様に解されている。『とよかげ』と『新勅撰和歌集』との間に詠み手の相違があるように見えることは、

必ず指摘されている。前に述べたように、本来女性の返歌があつたのだとしたら、『新勅撰和歌集』の撰者である藤原定家は、その返歌の載る伝本から当該歌を採録したのかもしれない。或いは、定家の見た伝本が、現存本と同じ書かれ方であつたとしたら、定家が二三番歌をとよかげ詠と解した上で、伊尹詠として採録したと考えられる。そうであつた場合、定家の当該歌に対する解釈は、筆者の解釈に近いものなのだろう。

当該歌は、詞書に「またのとし」とあり、前の二首から一年経つた時の歌としてある。前の二首は、とよかげが会えなかつた女性に自分の誠意を伝えようとする歌と考えられるが、それに対する女性の反応や女性とのやりとりなどが全く示されないまま、一年後へ移つている。そして、のべの死に關する歌が配される。このことより、当該段の三首は、のべを関わらせた歌であることが重要とされていると考えられる。

以上を考え合わせると、当該段の三首に込められた意図が見えてくるように思う。それは、童のべが、詞書に示されるように、取り次ぎに不備があつたり亡くなつてしまつたりと、実際には仲介役として十分に働いていない一方で、とよかげが女性とやりとりする歌の中では、とよかげの思慕を表す表現の素材として仲介役を果たすという、現実と歌の中の違いを見せることなのではないだろうか。二二番歌では、「のべやしるらん」と詠み、のべを女性との仲介役として位置づけることで、女性への思いを率直に伝えていく。二二番歌では、「まつむしのこゑもきこえぬのべにくる人もあらじ」と詠み、のべに会つたことを予定外のこととして表すことで、女性への思慕を伝えていく。二三番歌は、ひとまずとよかげ詠と考えておくが、「白露はむすびやするとはなすすきとふべきのべ」と詠み、そののべの姿が見えないと訴えることで、女性とのやりとりを大切にしたいという思いを表していると言えよう。このように、歌の中ののべは景物の「野辺」としても文脈を作り出し、その文脈は、とよかげの女性への思慕を表す表現となつている。これは、童のべが「のべ」という名であつたからこそ可能になる表現である。当該段の三首では、特定の語の、歌の中で同音の語を重ねてそれぞれの意味を發揮し得るといふ性質が、活用されていると言える。

当該段では、とよかげと女性の恋の展開への関心のためではなく、現実と歌におけるのべの仲介の機能の違いに目を向けるために歌を配していると考えられる。堤和博^④氏は、当該段について、「眼目はとよかげ・「のべ」・「女」の三人の絡み」だと述べている。そして、二三番歌を女性詠と解した上で、当該歌は女性に役割を与えるための虚構であるとし、「「のべ」を喪つた悲しみと、これからとよかげは自分だけに愛情を注いでくれるであろうという期待感が微妙に絡み合つた「女」の心境を詠んだ歌と見

て取れ、三人の関係の絡みが出てくる」のだと述べている。女性詠である場合、女性の「期待感」を読み取ることも可能ではあるが、当該歌が前の二首から時を経て「のべ」を詠み込んでいることから、やはり、「のべ」が詠み込まれ続けるところに意図を見出すべきだと思う。当該歌に女性の気持ちを表すことは第一の意図ではなかったのではないかと思われる。

五、終わりに

以上、『とよかげ』の五段における二一番歌から二三番歌、すなわち童のべに関する歌の内容と意図について、表現に着目し、詞書に即した解釈を試みて、再考を行った。本稿の考察で見えたことは、のべが現実では果たし得なかつた役割を歌の表現の中で果たしているという、現実と歌の表現の中の違いを示すことが、当該段の意図ではないかということである。ここでは、特定の語が歌の中で同音の語を重ねられて、それぞれの意味を発揮するということが利用されている。三首において、「のべ」という語は、「野辺」として意味を持つことで景物の文脈を作り出し、とよかげの女性への思いを表す表現を作り出している。これにより、童のべは、歌においてとよかげと女性の仲介役を果たしている。詞書では、取り次ぎに不備があつたことや亡くなったことが示され、その役割を果たし切れていないことが表される一方、歌の中では、とよかげの思いを表す表現の要素となり、仲介役を果たしているのである。三首は、のべの仲介役としての働きを可能にするものである。そして、この三首は、現実でできなかったことを表現の中で可能にするという歌の表現の可能性を、示す機能を持つていると言える。このような、心情表現に留まらない、歌の表現の可能性を示していくことが、『とよかげ』創作の意図の一つにあつたことが窺える。

曾根誠一氏は、当該段について、「この（筆者注：とよかげとのべの）交情自体が元来内包している常識からの逸脱ということが眼目となつているのであり、かつそれが好色者豊蔭像を浮き彫りにする構造となつてい」と解している。そして、二三番歌に続く「これにてぞなくなりけりとはしりける」について、のべとの交情の「終止符」としての役割を指摘している。とよかげを好色者と見ることはできる。しかし、本稿で指摘したように、当該段では、歌に「のべ」が詠まれ続けていることやその表現、各歌の配され方が、伊尹の意図を表しているように見受けられる。『とよかげ』の各段の歌は、とよかげと女性とのやりとりにおけるものであるが、当該段を分析す

ると、必ずしも女性との恋の展開を示すことが意図ではないと考えられる。

ところで、伊尹は、自分を「くちをしきげす」とよかげに仮託してこの作品を作つたが、その仮託の意図や効果は、本稿の考察では見えてこなかつた。ただ、二一番歌では、相手の女性に來訪を知られないというつらい思いをしても、相手への思慕を率直に訴えており、これは、とよかげの人物像と関わりそうである。率直で一途な思いの伝達は、他の段にも見られる。とよかげという人物への仮託と歌の関わりについては、他の段の歌の考察と合わせて考えてみたい。

注

- (1) 『大鏡』地・太政大臣伊尹の条に、「このおとどは、一条摂政と申しき。これ、九条殿の一男におはします。いみじき御集つくりて、豊景と名のらせたまへり」とある。上記の引用は『新編日本古典文学全集 大鏡』（橋健二氏・加藤静子氏（校注・訳）、小学館、二〇〇二年三月）による。
- (2) 鈴木棠三氏「一條摂政御集の研究」（『文学』第三卷第六号、一九三五年六月）。
- (3) 『とよかげ』の引用及び歌集の引用は、すべて『新編国歌大観』による。歌の後の（ ）内の漢数字は、歌番号を示す。
- (4) 冒頭は「おほくらのしじやうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかかりけるととき女のもとにいひやりけることどもをかきあつめたるなり、おほやけごとさわがしうて、をかしとおもひけることどもありけれど、わすれなどしてのちにみれば、ことにもあらずぞありける」。
- (5) 内田強氏「二条摂政御集」前半部の物語性（『平安朝文学探求』昭和五十四年度、一九八〇年）、堤和博氏「とよかげ」の部の特質（堤和博氏『研究叢書369 歌語り・歌物語隆盛の頃——伊尹・本院侍従・道綱母達の人生とその時代——』和泉書院、二〇〇七年一〇月、第一部I第三章第一節）。
- (6) 平安文学論説会『二条摂政御集注釈』（瑞書房、一九六七年一月）。
- (7) 木船重昭氏『二条摂政御集』解釈とところどころ（『中京大学文学部紀要』通巻第三九号、一九八一年一月）。
- (8) 犬養廉氏（校注）『新日本古典文学大系 平安私家集』（岩波書店、一九九四年二月）。
- (9) 『角川古語大辞典』では、「の」が対象を表す用法の例として、「めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられ給ふ」（『源氏物語』未摘花巻）、「まことにいとあやしき御心の、げにいかでならはせ給ひけむ」（『源氏物語』浮舟巻）が挙げられている。上記の引用は『新日本古典文学大

- 系 源氏物語』（柳井滋氏・他 校注）、岩波書店、一九九三年一月から一九九七年三月）による。
- (10) 平野由紀子氏・千里集輪読会『私家集全積叢書36 千里集全釈』（風間書房、二〇〇七年二月）。
- (11) 『新勅撰和歌集』が、現存の益田家旧蔵本以外の『伊尹集』を選歌材料にしたであろうことは、注（5）に挙げた堤氏の著書で詳しく触れられている。
- (12) 中川博夫氏『和歌文学大系 6 新勅撰和歌集』（明治書院、二〇〇五年六月）。
- (13) 神作光一氏・長谷川哲夫氏『新勅撰和歌集全釈七（巻第十八く巻第二十）』（風間書房、二〇〇七年五月）。
- (14) 注（5）に挙げた論考に同じ。
- (15) 曾根誠一氏『「とよかげ」の方法（続）——Ⅴ段からⅧ段の検討——』（『平安文学研究』第七九・八〇輯、一九八八年一〇月）。

A study of the function of the waka poems in “Toyokage”:
Reconsideration about the waka poems which relate the girl servant Nobe

TAKAHASHI Hideko

Abstract

“Toyokage” is a collection of waka poems, which was compiled by Fujiwara-no-Koremasa so as to make it seem like a story. I think Koremasa’s purpose of making it up is embodied in the waka poems and the distribution of them in “Toyokage”. In this paper I view the function of the waka poems by reading the three poems from No. 21 to No. 23 which relate the girl servant Nobe, who served under a Female.

These three poems are written in the fifth story of “Toyokage”. I think this story is intended to show the difference of Nobe’s work. On one hand Nobe does not seem to work well because she failed to intermedate between Toyokage and the Female and also died. On the other hand she seems to contribute to make Toyokage’s expression in the three waka poems he sent to the Female. In each poem the word ‘nobe’ is included and means not only the servant’s name but also a field. The context made by the meaning of a field gives expression to Toyokage’s heart for the Female.

In conclusion I think the function of these waka poems is to construct a world which differs from the real one.

Key words: “Ichijō-Sesshō-Gyosyu”, “Toyokage”, Fujiwara-no-Koremasa, a function of the waka poems, kake-kotoba